



この本は、「かわいい」が、古典的な女らしさから、自分らしく生きたいと願う女子たちの希望の表れに変わったとして、ゲーム、ロック、歴史、ハロウィン、メイド、島ガールなどでの「かわいい」を追求する。「かわいいの氾濫は文化的未成熟の表れ」という批判に対しては、池田氏は、女性の活動領域の拡大など、社会がより多様性を求める時に必要となる感性ととらえる。従来の男性的とされていた領域に、もつと別のセンスや価値観を持ち込むことによって、男女とも心地よくその領域に関われるようになるというのだ。

ポスト〈カワイイ〉の文化社会学  
女子たちの「新たな楽しみ」を探る



吉光正絵、池田太臣、西原麻里 編著  
3780円 ミネルヴァ書房  
☎075-581-5191

「生まれながらの」自分らしさ体現型だと言う。そこでは、「男性から見られる」という意識から解放された「女子としての自分」の満足があるという。永田夏来氏は、量的調査の結果から、「夏フェス女子」は、幼少期に美術館・博物館訪問やクラシック視聴を経験した者が有意に多いと言う。そして、この

ような「文化資本の高い女性」が、「夏フェス」での写真写りの良さや「かわいい」をネットで発信しているという。以上を、吉光氏は、「心躍る楽しみ」と表現している。評者は考える。人には個人や社会人としての成長とは別に、そのこと自体が癒しや「心躍る楽しみ」になる時間が大切だ。それが社会における新しい価値や文化の創造につながる。しかし、そこに格差があるとすれば、教育は、貧困な子どもに対して、文化資本提供の手を差し伸べることも考えたい。

(聖徳大学教授・西村美東士)